

〔共同研究：天変地異の社会学Ⅲ〕

## 朝鮮時代における疫病流行と 黄海道九月山三聖祠における檀君祭祀

佐々充昭

<目次>

はじめに

- 一. 朝鮮王朝の成立と檀君・箕子祭祀の確立
- 二. 黄海道九月山三聖祠における檀君三神信仰
- 三. 黄海道地域における疫病流行と檀君の祟り説  
おわりに

### はじめに

神仏や霊魂などの超自然的存在が人間に様々な災いを与えるとする祟り信仰は、東アジア全般によく見られるものである。古代の東アジアでは、強い怨みをもって死んだ魂は死後に怨霊と化して、様々な災厄をもたらすと考えられた。天変地異などの異常気象やそれに伴って起こる自然災害などに対しても、怨霊の祟りと見なされることがしばしばあった<sup>1)</sup>。

古代からシャーマニズムが盛んであった朝鮮半島でも、このような祟りや怨霊信仰が顕著に見られた。朝鮮半島ではシャーマン（女巫）のことを巫堂（무당）と称し、シャーマニズムの伝統を一般的に「巫俗（무속）」と称する。朝鮮の巫俗においては、怨恨をもって非業の死を遂げた武将の霊を、人間生活に大きな影響を及ぼす將軍神として特に恐れた<sup>2)</sup>。例えば、高麗末の悲運の將軍として知られる崔瑩將軍は、巫堂たちの守護神として朝鮮巫俗の中で大きな役割を果たしている<sup>3)</sup>。朝鮮の巫堂たちは、怨みをもって死んだ崔瑩將軍を祀ることによって、その霊力でさまざまな災厄から人間を守ることができると考えたのである。このような將軍神に対する守護神信仰は、怨霊信仰の典型的な事例とみなすことができよう。

1) 日本の御霊信仰はその典型的な事例と言えるだろう。日本の怨霊観念と御霊信仰との関係については、柴田實『御霊信仰』（雄山閣、一九八八年）や、南かおり「御霊信仰の成立と展開」（『皇學館史学』第二六号、二〇一一年三月）などを参照。

2) 崔吉城『韓国のシャーマニズム』（弘文堂、一九八四年、三六七頁）。

3) 崔瑩將軍（一三一六～八八）は高麗王朝末期の名将である。朝鮮王朝を興した李成桂の上官だったが、李成桂が権力を得た後に処刑された。開城徳物山に崔瑩將軍をまつる祠堂が設けられた後、京畿道巫堂たちの信仰を集めた（村山智順『朝鮮の鬼神』朝鮮総督府、一九二九年、一六〇・二一三～四頁）。現在の韓国でも、崔瑩將軍を守護神として祀る巫堂は数多く、彼を祀っていない神堂はないと言われるほどである（趙興胤著、李惠玉訳『韓国の巫』彩流社、九七・一〇四頁）。

キーワード：檀君、九月山、三聖祠、三神信仰、疫病

その他にも、朝鮮の歴史を見てみると、天災や飢饉、流行病などの大きな災厄が発生した場合、歴史上怨みをもって死んだ人物たちの怨念が原因であると解釈されることがしばしばあった。そのような事例の一つとして、本稿では特に、朝鮮時代初期の一五世紀前半に黄海道地方で発生した疫病流行の事例について考察する。朝鮮半島では古代から伝染病が頻発し、特に朝鮮時代は「疫病の時代」と言われるほど疫病が頻繁に流行した。その被害も、多い時には数十万人、少ない場合でも数千人の死者が出るほどであった<sup>4)</sup>。朝鮮の為政者たちは、疫病の流行を最も恐ろしい災禍の一つとして非常に恐れ、その悲惨な状況をさまざまな歴史書に書き記している。朝鮮王朝歴代国王の実史を記録した『朝鮮王朝実録』にも、疫病関連の記録が多数掲載されている。それらを見ると、特に一五世紀の世宗代から成宗代にかけて、黄海道地方において疫病が大流行し、多数の死者を出したことが記録されている。それらの記録にはまた、疫病発生の原因が檀君の祟りであるとする言説が、地元の黄海道地方を中心に広まっていたことが記されている。

檀君とは、朝鮮半島最古の国である古朝鮮を建国したとされる神話的存在である。高麗時代末期の一二八〇年頃に僧侶の一然が撰述した『三国遺事』の中で、その名前が初めて登場した<sup>5)</sup>。それとほぼ同時期に、李承休が著述した『帝王韻記』の中でも、朝鮮に建てられた最初の国として檀君朝鮮のことが記された<sup>6)</sup>。これ以降、高麗朝の歴史家たちは檀君の存在を事実と認め、檀君朝鮮を朝鮮最古の国家と考えるようになっていった<sup>7)</sup>。李成桂が高麗朝の王権を奪取して、一三九二年に新王朝を建てたが、その際、この朝鮮半島最古の国家名にちなんで国号を「朝鮮」と定めた。そのために、李王朝では、建国後すぐに平壤府に檀君廟を建てて、檀君に対する国家的祭祀を行った<sup>8)</sup>。一方、平壤府の檀君廟とは別に、黄海道文化県の九月山にも三聖祠と呼ばれる檀君祠廟が存在していた。九月山の三聖祠では、すでに高麗時代から官民の間で檀君祭祀が行われていた<sup>9)</sup>。本稿では、朝鮮王朝成立当初における

4) 申東源「李朝時代の疫病対策」(『統一評論』第五六七号、二〇一三年一月、六六頁)。

5) 『三国遺事』巻一「紀異篇」冒頭の「古朝鮮(王儉朝鮮)」条に檀君神話が掲載されている(三品彰英遺撰『三国遺事考証(上)』塙書房、一九七五年、二九九頁)。『三国遺事』が撰述された高麗時代には、まだ李氏朝鮮王朝は存在していなかった。ここで「古朝鮮」と称しているのは、檀君王儉によって建てられた朝鮮が、それまでに知られていた箕子朝鮮や衛氏朝鮮よりも古い朝鮮であるという意味である。その後、李成桂が朝鮮王朝を建ててからは、李氏朝鮮と区別するために、古代に建国された朝鮮国を「古朝鮮」と総称するようになった。本稿でもこの通例にならうことにする。

6) 『帝王韻記』下巻「東國君王開國年代」の「前朝鮮」条(『帝王韻記・勳安居士文集』亜細亜文化社、一九七七年、三六頁)。「帝王韻記」は植民地期の一九三〇年代に発見され、一九三九年に朝鮮古典刊行会から影印本が発表された。その当時の様子が、孫晉泰「檀君か? 壇君か?」一九三九年四月『孫晉泰先生全集』第六巻、太学社、一九八一年、二五~七頁)に述べられている。現在、韓国文化財管理局の資料として、『帝王韻記調査報告書』(朴相国、一九八五年)がある。

7) 例えば、高麗恭愍王一〇(一三六一)年に、白文寶が国王に改革の必要性を力説した際、「吾東方自檀君至今、已三千六百年…」と述べている(『高麗史』巻一一二「列伝」巻二五、諸臣、白文寶)。『高麗史』に関しては、韓国の国史編纂委員会ホームページで公開されているデータベース(<http://db.history.go.kr/KOREA/>)を参照した(以下同じ)。

8) 平壤府の檀君廟における檀君祭祀に関しては、桑野英治「李朝初期の祀典を通してみた檀君祭祀」(『朝鮮学報』第一三五号、一九九〇年四月)を参照。

9) 九月山三聖祠に関しては、金成煥「高麗時代 三聖祠의 檀君崇拜」(『白山学報』第四六号、白山学会、一九九六年七月)、同『高麗時代の 檀君伝承과 認識』(景仁文化社、二〇〇二年)に詳しい考察

平壤檀君廟と九月山三聖祠における檀君祭祀の在り方について比較しながら、一五世紀に黄海道地方で発生した疫病に関して、檀君の崇り説がどのようにして発生したのか明らかにする。この事例研究を通じて、東アジア地域に広く見られる天災・疫病による怨霊崇り説が、朝鮮半島ではどのように展開していたのか具体的に考察してみたい。

### 一．朝鮮王朝の成立と檀君・箕子祭祀の確立

高麗時代末期において、倭寇や紅巾軍の撃退などで功績をあげた武人の李成桂は、威化島回軍（一三八八年に遼東への派遣軍を撤回させた事件）で朝廷の実権を掌握し、一三九二年に王位に就いた。ちょうどその頃、中国では元の支配力が衰え、一三六八年に明が建国されていた。国王となった李太祖（在位：一三九二～九八）は、高麗朝の中で力を持っていた親元派勢力を排斥するために、明支持の立場をとる新興の儒官たちを登用し、彼らの進言に従って、儒教（朱子学）を統治理念とする新たな中央集権国家の構築を目指した。李太祖は即位後、対外関係を安定化させるために明に使者を派遣した。その際、自ら樹立した政権を認めってもらうために、新王朝の国号を明側に決定してもらうように要請した。李氏政権側は新王朝の国号として「朝鮮」と「和寧」（李成桂の出生地であった咸鏡南道永興の旧名にちなんだもの）の二つを候補として打診した。結局、明側は「朝鮮」の方を推薦し、これが新王朝の国号となった。その後、第三代太宗が即位すると、一四〇一年に明の冊封を正式に受けた。

こうして朝鮮王朝が新たに成立すると、新王朝の歴史的正当性を付与するものとして古朝鮮の建国者である檀君の存在が重視されるようになった。しかし、新王朝が重視したのは、ただ檀君だけではなかった。檀君の後に登場した、古朝鮮の建国聖人として箕子も尊崇の対象とされた。箕子に関しては、中国と朝鮮の歴史書に様々な伝承が伝えられている。まず朝鮮側の歴史書を見ると、檀君の記事を最初に掲載した『三国遺事』では、檀君が山神となって隠棲した後、中国殷人である箕子が東来して古朝鮮を継承したと記している<sup>10)</sup>。また、『帝王韻記』でも、檀君朝鮮に次ぐものとして箕子朝鮮の歴史を記している<sup>11)</sup>。一方、中国側の歴史書にも、『史記』をはじめとする正史の中に、箕子朝鮮の存在が記録されている<sup>12)</sup>。箕子朝鮮に関する記事は伝説の類のもので、内容が一貫しているわけではないが、概ね中国殷の太子である箕子が朝鮮に東来し、「八条之法」を制定するなどの善政・徳治を行ったとするものであり、中には周武王によって朝鮮侯に封じられたと記す記事もあった<sup>13)</sup>。しかし、

が行われている。本稿もこれらの論著を参照した。

10) 前掲『三国遺事考証（上）』三〇一頁。

11) 前掲『帝王韻紀・勳安居士文集』三六頁。

12) 中国側の歴史書には、『史記』巻一一五「朝鮮伝」に見られるように、中国の戦国七雄の燕が亡命して建てた衛満朝鮮に関して比較的詳細な記録が残されている。しかし、朝鮮側の歴史家たちは、暴力によって朝鮮半島に攻め込み王権を侵奪したものとして、衛満朝鮮の存在を重視しなかった。しかし、同じく中国から東来した箕子に関しては、道徳文化を朝鮮に根付かせた古朝鮮の建国聖人として高く評価している。

13) 例えば『尚書大伝』に「武王積箕子之囚，箕子不忍為周之積，走之朝鮮，武王聞之，因以朝鮮封之」とある。また、『史記』宋微子世家に「武王既克殷，訪問箕子……於是武王乃封箕子於朝鮮，而不臣

中国側の歴史書には、檀君に関する記事はいっさいみられなかった。このように檀君朝鮮は高麗時代末期に編纂された朝鮮側の歴史書に初めて登場したものであったのに対して、箕子朝鮮は『史記』をはじめとする中国正史の中に記載され、非常に古くから知られたものであった<sup>14)</sup>。

そのために、儒教（朱子学）を統治理念とした李氏朝鮮王朝では、檀君よりもむしろ、箕子の方を古朝鮮の建国聖人として重視した。それはまた、明の冊封を受けて、新王朝に対する中国側の承認を得るといふ当時の時代要請を反映したものであった。実際、李氏政権側が新しい国号の候補として「朝鮮」を選定し、明側がこの国号を勧めたのも、周の武王が箕子を朝鮮に封じて儒教的な善政を行ったという事蹟に因んだものであった。しかし、その一方で、李氏政権側では、中国とは異なる自国独自の歴史的主体性も確立する必要があった。こうして李氏政権側の為政者たちは、檀君に歴史の悠久性と天孫の後裔としての誇りを求め、箕子に儒教的道徳文化の基礎を求めるといふ形で、新王朝の歴史的正当性を説明しようとした。李氏政権側が「朝鮮」といふ国号を採択した背景には、このように「檀君＝天命」「箕子＝教化」として、檀君朝鮮と箕子朝鮮の二つを継承するという歴史意識が存在していたのである。そのために、朝鮮王朝の樹立直後から、檀君と箕子に対する国家的な祭祀を行うべきことが建議された。その際、朝鮮王朝成立当初に提起された檀君と箕子に対する祭祀は、高麗時代に行われていた祭祀制度を儒教（朱子学）的な祭祀制度としてどのように改編するかという問題として議論された。

ここで時代は遡るが、行論上、朝鮮時代における祭祀の制度改革がどのようなものであったか理解するために、まず高麗時代の祭祀制度についてみておきたい。新羅時代から高麗時代にかけて、朝鮮半島では「護国仏教」の考えが重視され、仏教が全盛を極めた時代であった。特に新羅末期に風水地理思想に通じた道詵という高僧が登場し、高麗を建国した王建がこれに深く帰依した。高麗の太祖王建は、後代の国王たちがとるべき政策指針を示した十条の遺訓として『訓要十条』を残した。その中では、道詵の風水地理説にならって寺院を建立するなど、仏教や風水地理思想が非常に重視されている<sup>15)</sup>。そのこともあり、高麗朝では仏

也、其後箕子朝周、過故殷虛」と記している。『漢書』地理志、燕地条には「殷道衰、箕子去之朝鮮、教其民以礼義田蠶織作、樂浪・朝鮮民犯禁八條……可貴哉、仁賢之化也」とある。『後漢書』東夷列伝の「論」では、「昔箕子違衰殷之運、避地朝鮮。始其國俗未有聞也、及施八條之約、使人知禁、遂乃邑無淫盜、門不夜扃、回頑薄之俗、就寬略之法、行數百年、故東夷通以柔謹為風、異乎三方者也。苟政之所暢、則道義存焉。仲尼懷憤、以為九夷可居」と記されている。以上、箕子関連記事に関しては、『(国訳)中国正朝鮮伝』(大韓民国文教部国史編纂委員会編纂兼発行、一九八六年)を参照した。

14) 高麗末に突然「檀君」の名前が登場したことに関しては、高麗朝が元（モンゴル）による支配を受けた時期に民族意識が高揚したことと関連して説明されている。実際、檀君の名前を初めて記した『三国遺事』と『帝王韻記』は、元の干渉を受けていた忠烈王代に書かれたものであった。これに関しては、今西龍「檀君考」(『朝鮮古史の研究』国書刊行会、一九八八年、六四～八〇頁)を参照。

15) 九四三年高麗太祖が亡くなる一ヶ月前に遺訓として伝えたもの。第一条には仏教を尚崇すること、第二条には道詵の風水術によって寺院を建てることが記されている。「其一曰、我國家大業、必資諸佛護衛之力。故創禪教寺院、差遣住持焚修、使各治其業。後世、姦臣執政、徇僧請謁、各業寺社、爭相換奪、切宜禁之。其二曰、諸寺院、皆道詵推占山水順逆而開創。道詵云、吾所占定外、妄加創造、則損薄地徳、祚業不永。朕念後世國王公侯后妃朝臣、各稱願堂、或増創造、則大可憂也。新羅之末、

教を保護・重視する政策がとられた。また、高麗朝では、様々な仏教行事が国家的な事業として行われた。重要なものに正月一五日（後に二月一五日）に開かれた燃灯会と、一一月一五日に開かれた八閔会があげられる<sup>16)</sup>。燃灯会では、国王と臣下がともに参列して踊りや歌を楽しみ、仏教聖人、国のために命を捧げた英雄などの祭祀を行い、国家と王室の泰平を祈願するものであった<sup>17)</sup>。また、八閔会は天・五岳・名山・大川に祭祀を行う行事であるが、土俗信仰・道教の醮祭（星宿に対する祭儀）・仏教儀礼の三者が混じり合った、朝鮮土着の祭りとして発展していった。八閔会には、周辺の多くの国の使節と女真酋長などが参加し、朝貢を行って答礼品を受け取るという形で貿易が行われ、高麗を代表する祭典として国外にも広く知られたものであった<sup>18)</sup>。

一方、高麗時代においては、道教が仏教と習合しながら国家行事として奨励された。道教は巫俗・山岳信仰などの民間信仰と習合し、重要な山川に対する祭祀儀礼として受け入れられていった。大山や大河が擬人化され、さまざまな神の名前や官職が与えられた。高麗時代には自然災害を克服するために、これら自然山川に付けられた神々に対して、道教的な祭祀が国家的規模で執り行われたのである。一例をあげると、睿宗代には福源宮という道教寺院が建立され、醮祭が頻繁に行われた。このほか、大清観・神格殿・浄事色・九曜堂などの場所でも醮祭が行われた<sup>19)</sup>。このように高麗時代には、仏教や道教、その他の民間信仰が渾然一体となって混合しあい、土着の宗教伝統を作りあげ、高麗王室もそれらを国家的な王室行事として取り入れていたのである。

これに対して、儒教を統治理念とする朝鮮王朝が新たに樹立されると、それまでの祭祀の在り方を儒教的な様式に改める必要が生じた。檀君と箕子に対する祭祀問題は、このような朝鮮王朝創建時における儒教的祭祀の確立という時代的要請の中で浮上したのである。その際、すでに箕子を祀る祠堂が平安道平壤府に存在し、箕子に対する祭祀が行われていた<sup>20)</sup>。

競造浮屠，衰損地德，以底於亡，可不戒哉」（『高麗史』卷二「太祖世家」卷二，太祖二六年四月条）。

16) 『訓要十条』の第六条では、燃灯会は仏を奉るものであり、八閔会は天と五岳・名山・大川・龍神を奉るものとして次のように述べている。「朕所至願，在於燃燈八閔，燃燈所以事佛，八閔所以事天靈及五嶽名山大川龍神也。後世姦臣建白加減者，切宜禁止。吾亦當初誓心，會日不犯國忌，君臣同樂，宜當敬依行之」（『高麗史』卷二「太祖世家」卷二，太祖二六年四月条）。

17) もともとは中国の唐代に行われていた仏教行事であったが、三国時代に朝鮮半島に伝播した後、高麗朝において独自の国家行事として発展していった（鎌田茂雄『朝鮮仏教史』東京大学出版会，一九八七年，一六一～三頁）。現在、韓国では毎年陰曆四月八日を釈迦誕生日（부처님오신날）として祝い、公休日としている。この日に合わせて、ソウル市内では「燃灯祝祭」が開催される。この祭りは、燃灯会の再現を目指したものであり、「伝統の創造」の典型的な事例である。毎年この日になると、ソウル市庁前や清溪川などソウル市内の至る所に燃灯（提灯）が飾られ、盛大な提灯行列イベントが行われる。この燃灯祝祭は、今や仏教信者だけではなく、誰でもが楽しめる韓国最大の仏教イベントとなっている。

18) 鎌田茂雄，前掲『朝鮮仏教史』一六二～三頁。

19) 車柱環著，三浦国雄・野崎充彦訳『朝鮮の道教』（人文書院，一九九〇年）の第六章「高麗の道教思想」（一九二～六頁）を参照。

20) 箕子は、すでに高句麗の時代から平壤で祀られていた。これに関しては、『三国史記』に『新唐書』高句麗伝を引用しながら、「高句麗俗多淫祠，祀靈星及日箕子可汗等神，國左有大穴曰神隧，每十月王皆自祭」と記されている（『三国史記』卷三二，雜志第一，祭祀）。その後、高麗時代に新興の士大夫階級が台頭すると、箕子尊崇の風潮が起こった。忠肅王一二（一三二五）年一〇月には平壤府に箕

これに対して、檀君の祠廟は存在していなかった。そのために、平壤の箕子廟に檀君を合祀することが提案された。これに関しては、一三九二年に李成桂が国王に即位した翌月に、朝廷の儀礼・祭事を扱う部署である礼曹の最高職・典書についていた趙璞が、檀君を「東方始受命之主」とし、箕子を「始興教化之君」として、両者を平壤に祀るべきであるという上疏文をあげている。その時の主張を見てみると、「天命を受けて王朝が新しくなった故に、前朝の弊害を踏襲すべきではない」として、仏典の法話を行う百高座法席や仏法を説く道場、さらには道教的な祠殿や神祠、醮祭などの改廃が同時に要請されている。また、円丘の祭祀は中朝の天子だけが行う祭天礼であるためにこれを取り止め、「全国の様々な神廟と各州郡の城隍堂はただ某州・某郡・城隍の神とだけ称し、神位板を置いて毎年春秋に致祭を行い、奠物・祭器・酌献もすべて朝廷の礼制にもとづく」ように指示している<sup>21)</sup>。このことからわかるように、朝鮮王朝創建時に提起された檀君・箕子に対する祭祀は全国各地に存在する祠廟での祭祀を儒教的な形式に統一するという課題の中で提案されたものであった。さらに、太宗一二（一四一二）年になると、建国功臣の一人であった河崙らによって、檀君と箕子を同じ廟に祀り、祀典に則って春秋の致祭を行うことが提案され、この案が受け入れられた<sup>22)</sup>。こうして、平壤府にある箕子廟において、箕子と合祀するという形で毎年春秋の両次にわたって檀君に対する祭祀が行われるようになったのである<sup>23)</sup>。

その後、世宗の代になると、檀君に対する祭祀がより本格的な形で整備されていった。まず、世宗七（一四二五）年九月に司醮署注簿の鄭陟が、箕子廟において箕子と檀君が合祀されていることを問題視し、檀君祠堂を別に建てるべきであるとする上疏文を上げた。ただし、その理由をみると、「朝鮮の政教を盛行させ文化を美化し朝鮮の名を轟かせた」のは箕子であり、「明の太祖皇帝が朝鮮の名を賜ったのも箕子に由来する」ために、「箕子廟において檀君を主とするのは都合が悪い」とするものであった<sup>24)</sup>。結局、この建議が聞き入れられ、世宗一一（一四二九）年に、平壤の箕子廟の南側に、高句麗の始祖朱蒙と檀君を同時に合祀する形で檀君を祀る祠廟が建てられた。檀君を高句麗始祖朱蒙と合祀したのは、歴史上、この二人が深い関係を有していると考えられたからである<sup>25)</sup>。また、檀君・箕子・東明王に対する祭祀の形式は、社稷と宗廟で行う「大祀」に次ぐ「中祀」と定められた<sup>26)</sup>。さらに、この

子祠が建てられ祭祀が行われた（『高麗史』巻六三、「志」巻一七、礼五）。また、高麗時代には、箕子が設けた井田制の跡地や箕子墓も存在した（『高麗史』巻五八、「志」巻一二、地理三）。

21) 『太祖実録』巻一、太祖一（一三九二）年八月庚申〔一日〕条。朝鮮王朝実録に関しては、韓国の国史編纂委員会ホームページで公開されているデータベース（<http://sillok.history.go.kr/main/main.jsp>）を参照した（以下同じ）。

22) 『太宗実録』巻二三、太宗一二（一四一二）年六月己未〔六日〕条。

23) 桑野栄治、前掲論文、六三頁。

24) 『世宗実録』巻二九、世宗七（一四二五）年九月辛酉〔二五日〕条。

25) 例えば、『三国遺事』巻一「王曆」の「東明王」の項目では、「第一東明王、甲申立、理十八、姓高名朱蒙、一作鄒蒙、壇君之子」と説明している（前掲『三国遺事考証（上）』四〇・四三頁）。ただし、『三国遺事』に記載された高句麗東明王朱蒙の建国説話を見てみると、「壇君記云、君與西河河伯之女要親、有産子名、曰夫妻、今拋此記、則解慕漱私河伯之女而後産朱蒙、壇君記云、産子名曰夫妻、夫妻與朱蒙異母兄弟也」と記している（前掲『三国遺事考証（上）』三八一頁）。

ような措置は、高句麗を含む百濟・新羅の三国始祖—東明王・温祚王・赫居世—それぞれの廟宇の設置問題と同時に発議されている<sup>27)</sup>。すなわち、世宗代に行われたこのような祭祀の整備は、歴代国家の始祖王に対する祭祀を儒教形式にのっとりて体系化することにより、儒教的統治をより強化しようとするものであったのである。とりわけ古朝鮮建国の二大聖人である檀君と箕子に対する祭祀を整備することにより、朝鮮王朝の歴史的正当性を確固たるものにしようとする狙いがあったと考えられる。

さらに世宗一二（一四三〇）年には、礼曹からの進言で、全国各地に設けられた祠堂や廟宇に関する調査が行われ、由来が怪しげなものを撤廃すべきであるとする上疏がなされた<sup>28)</sup>。これに従って、世宗一九（一四三七）年に、全国各地に設けられた祭壇と祠廟に関する祭祀制度が新たに制定された。それは、高麗時代までの祭祀方法を儒教式に一変させる大規模な改革であった。この改革令では、地祇神や城隍神として祀られていた神像を撤去して、儒教式の神位版で神名だけを記すようにし、祭物や祭祀の方法も儒教式に行うように定め、祭服に関しても儒冠をかぶるというように、詳細な指示が出された。特に注目したいのは、全国の祠廟に「護国神」と祀られていた地祇神の神位に関して、すべて「護国」の文字を削除する措置がとられたことである<sup>29)</sup>。このような地祇神に対する護国性の剥奪という措置は、前王朝である高麗朝の掲げた護国仏教の理念を完全に否定すると同時に、全国で行われていたあらゆる地方祭祀を朝鮮王朝の独占的な支配下におさめようとするものであった。それはまた、地方祭祀を格下げする同時に、新しく樹立された朝鮮王朝の王権強化を目指したものであったと言えよう。実際、この時の改革令では、平安道における祭祀として、檀君と箕子に対する神位と祭祀方法も改定された。その際、それまで「朝鮮檀君之位」「朝鮮侯箕子之位」と書かれていた神位板を、それぞれ「朝鮮檀君」「後朝鮮始祖箕子」と記すように指示が出された<sup>30)</sup>。このような「侯」の字の削除は、朝鮮王朝の淵源となった檀君朝鮮と箕子朝鮮の歴史的独自性を強調するためであったと考えられる。このように、世宗代に行われた檀君廟の建立と檀君に対する国家的次元での祭祀は、箕子廟における箕子祭祀と並立しながら、全国の祠廟を儒教式に改編する過程で行われたものであった。

こうして世宗代に確立された檀君祭祀は、箕子に対する祭祀と共に、朝鮮王朝の歴史的正当性と悠久性を象徴する国家的祭祀として、後の国王代にも継承されていった。例えば、世

26) 『世宗実録』五禮，吉禮序例，辨祀。

27) 桑野栄治，前掲論文，六七頁。

28) 『世宗実録』卷四九，世宗一二（一四三〇）年八月甲戌〔六日〕条。

29) 『世宗実録』卷七六，世宗一九（一四三七）年三月癸卯〔一三日〕条。それに該当する本文を抜粋すると以下の通りである。「禮曹據諸道巡審別監啓本，詳定嶽，海，瀆，山川壇廟，及神牌制度……海豊郡白馬山壇位版，書白馬護國之神，請削護國二字……伊川縣德津溟所壇位版，書德津溟所護國之神，請削護國二字。洪川縣八峯山祠廟位版，書八峯山大王之神，請削大王二字……咸興府咸興城隍祠廟位版，書咸興城隍護國伯神，請削護國伯三字……大興縣大岑島廟位版，書大岑島護國之神，請削護國二字……」。

30) 同上。「平安道，國行……箕子，中祀，殿位版，書朝鮮始祖箕子。檀君，中祀，高句麗始祖，中祀，殿檀君位版，書朝鮮檀君，高句麗位版，書高句麗始祖」。

租は即位の翌年（一四五六年）四月に、平壤府にある檀君・箕子・高句麗始祖の祠廟を大々的に修繕し<sup>31)</sup>、同年七月には、檀君の神位版を「朝鮮始祖檀君之位」、箕子の神位版を「後朝鮮始祖箕子之位」と改めさせた<sup>32)</sup>。世祖六（一四六〇）年にも、国王自ら平壤巡幸を行った際に檀君廟で親祭を行っている<sup>33)</sup>。また、成宗一九（一四八八）年には、中国からの使臣が平壤に到着した際に、箕子廟とともに檀君廟を訪問している。当時の中国人は一般的に、古朝鮮の始祖が箕子であると認識していた。これに対して、檀君廟の存在は、箕子に先立つ国として檀君朝鮮が存在したことを中国側に知らしめる役割を果たしたことが、この時の記録からうかがえる<sup>34)</sup>。その後、平壤府の檀君廟は壬辰倭乱の時に焼失したが、一六一七年（光海君九年）に再建された。特に英祖は檀君廟に大きな関心をみせ、英祖元年（一七二五年）には「崇靈殿」という扁額を下賜した<sup>35)</sup>。これ以降、平壤府の檀君廟は崇靈殿と呼ばれるようになった。また、英祖五（一七二九）年には殿参奉二人が置かれ<sup>36)</sup>、英祖八（一七三二）年には崇靈殿の大々的な修理が行われた<sup>37)</sup>。その後、正祖の代になると、檀君は崇靈殿、箕子は崇仁殿、新羅始祖は崇徳殿、高麗始祖は崇義殿、百濟始祖は崇烈殿と称され<sup>38)</sup>、歴代始祖廟に対する整備はここに完成した。

## 二. 黄海道九月山三聖祠における檀君三神信仰

上に述べたように、平壤府の檀君廟（崇靈殿）は、朝廷側が儒教儀礼に則った国家的な祭祀を行うために建てられたものであった。これに対して、黄海道文化県の九月山には檀君を祀った三聖祠という祠堂が存在し、地元の人々の篤い信仰を集めていた<sup>39)</sup>。黄海道九月山と檀君とは深い関係を有しており、これについては『三国遺事』の中で次のように記されている。すなわち、「檀君は平壤に都を定めて朝鮮を建て、さらに唐莊京に遷都した後、阿斯達山に入り山神となった。」さらに、「阿斯達」に関する註として、「無葉山または白岳ともい

31) 『世祖実録』卷三，世祖二（一四五六年）四月丁卯〔二八日〕条。

32) 『世祖実録』卷四，世祖二（一四五六年）七月戊辰〔一日〕条。

33) 『世祖実録』卷二二，世祖六（一四六〇）年一〇月己未〔一七日〕条。

34) 『成宗実録』卷二一四，成宗一九（一四八八）年三月丁卯〔三日〕条。中国の使臣が檀君祠廟を訪問した際、朝鮮側の接待使たちは、檀君の歴史記録を紹介した後、檀君・箕子・衛満の三朝鮮説を述べた。これに対して、中国側使臣は、「衛満の後は漢の武帝が将帥を送って朝鮮国を滅ぼしたことが漢史にある」と述べている。この時、中国側の使者は、箕子廟において四拝礼したのに対して、檀君廟では再拝礼しかしていない（『成宗実録』卷二一四，成宗一九（一四八八）年三月癸酉〔九日〕条）。このことから、檀君と箕子をめぐる古朝鮮認識が、中国との事大関係の中で非常に敏感な問題であったことがうかがえる。

35) 『春官通考（中）』卷四四，吉礼，崇靈殿の項（編集兼発行人崔珍源『春官通考（中）』成均館大学校大東文化研究院，一九七六年，二六五頁）。なお、本書には崇靈殿の沿革のほか、祭祀方法についても詳述されている。

36) 『承政院日記』英祖五（一七二九）年八月乙丑〔二三日〕条。『承政院日記』については、韓国の国史編纂委員会ホームページで公開されているデータベース（<http://sjw.history.go.kr/main/main.jsp>）を参照した（以下同じ）。

37) 『承政院日記』英祖八（一七三二）年一月戊寅〔二〇日〕条。

38) 『正祖実録』卷四三，正祖一九（一七九五）年九月丙寅〔一八日〕条。

39) 三聖祠に関する記録は、『春官通考（中）』卷四四，吉礼「三聖祠」の項（前掲書，二六三～四頁）に概略的な沿革が記されている。本稿はこれを参考にした。

い、白州の地方にあった。開城の東方に位置しているとも言われるが、今の白岳宮がそれである。……阿斯達の名は弓（弓は方とも書いた）忽山、または今旌達ともいった」と説明されている<sup>40)</sup>。また、『帝王韻記』でも、檀君朝鮮の歴史を記しながら、阿斯達について「今の九月山のことであり、一名を弓忽山または三危ともいう。現在でも祠堂がまだ残っている」<sup>41)</sup>と註記している。これらの記事にある通り、黄海道の九月山は、歴史記録に出てくる阿斯達山のことであり<sup>42)</sup>、檀君が都として定めた後、山神となった場所であると考えられていた。実際に九月山には、桓因〔檀因〕・桓雄〔檀雄〕・檀君の三人を祀った三聖祠という祠堂が存在した<sup>43)</sup>。九月山の三聖祠がいつ建てられたかは明らかではない。しかし、歴史記録を見ると、平壤府に檀君廟が建てられた世宗一一（一四二九）年よりも以前に、九月山の三聖祠で檀君が祀られていたことがわかる（これについては、後に詳述する）。そして、朝鮮王朝が建てられる頃になると、九月山の三聖祠は、地元である黄海道地域の人々の篤い信仰対象となっていた。

そのために、朝鮮王朝の樹立後、朝廷側が檀君の祠廟を平壤府に建てようとした際に、黄海道の人々はこの措置に強く反発した。これに関して、世宗七（一四二五）年に平壤府の箕子廟に檀君を合祀することが建議された際、右議政に出仕していた黄海道文化県出身の柳寛は、それに強く反対する上疏文をあげている。その上疏文の中で、柳寛はまず、故郷で古老たちから聞いた話として三聖祠の由来について述べている。その内容を要約すると以下の通りである<sup>44)</sup>。九月山は文化県の主山である。檀君朝鮮の時に名前を阿斯達山と言い、新羅時

40) 『三国遺事』第一「古朝鮮（王儉朝鮮）」条（前掲『三国遺事考証（上）』二九九頁）。

41) 『帝王韻記』下巻「東國君王開國年代」の「前朝鮮」条（前掲『帝王韻記・動安居士文集』三六頁）。

42) 一五三〇年の中宗代に編纂された官撰地理志『新增東國輿地勝覽』でも、九月山を阿斯達山であると説明している（『新增東國輿地勝覽』巻四二、黄海道文化縣「山川」条）。阿斯達（아사달：Asadal）山を九月山に比定する根拠としては、朝鮮語で「九」を「아홉（ahop）」、「月」を「달（dal）」と発音することから、阿斯達山は朝鮮語の発音であり、九月山はそれを漢字表記したものであるという説明がよくなされた。例えば、李瀾（一六八一～一七六三）は、「『阿斯』を諺語で『九』と言い、『達』を語で記すと『月』となるが、これは即ち今の九月山である」と述べている（李瀾『星湖僂説類選』巻九上、経史篇七、経史門四、東事紀事上、明文堂、一九八二年、二四四頁）。また、安鼎福が編纂した『東史綱目』附録下巻の「白岳考、附、阿斯達」では、『東國輿地勝覽』の記事を引用しながら、「方言で『阿斯』は『九』に近く、『達』は『月』に近い。むかし我が国の地名はすべて方言で呼んだために、これもまたそうである。ある者は、その山に宮闕の跡があるために世俗で『闕山』と称するのが伝わって『九月山』といった」と述べている。

43) 檀君神話を最初に掲載した『三国遺事』では、帝釈（天帝）である桓因の庶子・桓雄が熊女と結婚して誕生したのが檀君であると記している。三聖祠では、「桓因」を「檀因」、「桓雄」を「檀雄」と称し、「桓因〔檀因〕—桓雄〔檀雄〕—檀君」を三聖として祀っていた（これに関しては本文で後述する）。これに関して、『高麗史』巻五八、志、巻一二、地理三、西海道、豊州、儒州、儒州の項目では、「本高句麗闕口、高麗初、改今名……有九月山、世傳阿斯達山、莊莊坪〔莊莊坪〕、世傳檀君所都、即唐莊京之訛、三聖祠、有檀因、檀雄、檀君祠」と記している。『世宗実録』にもこれと同じ記事が掲載されている（『世宗実録』地理志、黄海道、豊川郡、文化縣）。『高麗史』は朝鮮時代に公刊されたものであり、朝鮮時代の記録が多数混入している。後に詳述するが、ちょうど世宗代に三聖祠に関する調査が行われた。世宗代の記事を『高麗史』に転載したものであったと考えられる。

44) 『世宗実録』巻四〇、世宗一〇（一四二八）年六月乙未〔一四日〕条。「右議政仍令致仕柳寛上書曰、黄海道文化縣、是臣本郷、自爲幼學、下去多年、聞諸父老之言、乃知事迹久矣。九月山是縣之主山、在檀君朝鮮時、名阿斯達山、至新羅改稱闕山……山名闕字、緩聲呼爲九月山。山之東嶺……嶺之腰有神堂焉、不知創於何代、北壁檀雄天王、東壁檀因天王、西壁檀君天王、文化之人常稱三聖堂、其山下

代に至って闕山と改称した。山名である「闕」の字をゆっくり発音して九月山となったと言う<sup>45)</sup>。山の東嶺の中腹に神堂があり、北壁には檀雄天王、東壁には檀因天王、西壁には檀君天王を祀った。文化県の人々はこれを三聖祠と呼んでいる。神堂の近くには烏や鹿が寄りつこうとしない。早魃の時に祈雨祭を行うと多少の効験を得たと言われている。文化県の東に「蔵壯」という名の土地があるが、父老たちは檀君の都であったと伝えている。このように説明した後、柳寛は、文化県にあると推定される檀君の定都地を詳しく調査するように訴え、さらに、箕子廟に檀君を合祀しようとすることに反対の意見を述べている。

しかし、柳寛のこのような訴えは聞き入れられなかった。先の述べたように、世宗一一（一四二九）年に、高句麗始祖と檀君を同時に合祀する形で、平壤に檀君廟が建てられたのである。朝廷側のこの措置に対して、柳寛の甥である柳思訥は強く反発し、世宗一八（一四三六）年に上疏文をあげた。柳思訥は叔父の意志を継ぎ、「高麗時代に九月山下に檀君廟が建てられ、その堂宇や神位板がまだ存在しているのに、これを打ち捨てて別の地に廟を建てるべきではない」と訴えた<sup>46)</sup>。黄海道出身官僚のこのような強い反発を見ると、九月山三聖祠に対する檀君信仰が、当時の黄海道地方の人々の間に相当深く根を下ろしていたことがうかがえる。また、朝廷側が九月山三聖堂における檀君祭祀を認めず、平壤府に一方的に檀君廟を建てたことに対して、黄海道人の不満は相当に大きかったと考えられる。そして、ちょうどその頃、黄海道地方から悪質な疫病（伝染病）が発生し、多数の死者を出すという災禍が起こった。その際、疫病発生の原因が、九月山三聖祠に祀られていた檀君の祟りであるとする噂が出回るようになっていったのである。以下ではその経緯について詳しく見てみたい。

### 三. 黄海道地域における疫病流行と檀君の祟り説

医学がまだ発達していなかった前近代の朝鮮において、原因不明の疫病（伝染病）の流行は、最も恐るべき災禍の一つであった。そのために、朝鮮の歴史書には、疫病流行に関する記事が詳細に記録されている<sup>47)</sup>。本稿で考察対象としている朝鮮王朝初期の頃を見てみると、特に黄海道地方で疫病が頻発していることがわかる。これに関して、朝鮮王朝実録の記事を見てみると、世宗代の一四三二年頃から黄海道地方で疫病が発生し、その後も同地方で疫病が頻発した事実が記録されている<sup>48)</sup>。特に一四五二年に黄海道地方から伝染病が発生した際

居人、亦稱曰聖堂里。堂之内外、鳥雀不棲、麋鹿不入。當早暵之時祈雨、稍有得焉。或云檀君入、阿斯達山、化爲神、則檀君之都、意在此山之下。三聖堂至今猶存、其迹可見。以今地望考之、文化之東、有地名蔵壯者、父老傳以爲檀君之都、今只有東、西卯山、爲可驗耳。或者以爲檀君、都于王儉城、今合在箕子廟。臣按檀君與堯竝立、至于箕子千有餘年、豈宜下合於箕子之廟。

45) 漢字の「闕」は朝鮮語で「꺆 (Gwol)」と発音する。これをゆっくり発音すると「九月 (구월 : Gu-Wol)」に通じる。

46) 『世宗実録』巻七五、世宗一八（一四三六）年一二月丁亥〔二六日〕条。

47) 三木栄『朝鮮医学史及疾病史』（思文閣出版、一九九一年、一六頁）の『朝鮮疾病史』第三章「李朝疾病史」には、朝鮮時代における疫病流行の年表が掲載されている。

48) これに関しては、世宗一九（一四三七）年一二月、世宗二〇（一四三八）年三月、世宗二一（一四三九）年閏二月、世宗二四（一四四二）年八月、世宗二六（一四四四）年一月に、詳しい記録が掲載されている（前掲『朝鮮医学史及疾病史』、一六頁）。

には、伝染病が四方に拡散し、北は平安道から南は畿県にまで至り、全国に多数の死者を出した。そのために、慶昌府尹李先齊が現地に使者を派遣して詳細な調査を行い、その結果を上疏文として朝廷に上げている。この上疏文には、当時の疫病流行の様子が克明に記されているので、少々長くなるが、以下ではその内容について詳しく考察してみたい<sup>49)</sup>。まず、この上疏文では、黄海道の人々から直接聞いた話として次のように記している。

以前に文化県の檀君祠を平壤に移した後、怪気が結集して、まるで鬼神の形をしたようなものが夜に現れ、黒気が陣を成して動き回り、声をあげた。ある一人がこれを見てその奇怪さに驚き、これを避けて隠れようとした。この時から病気が拡がっていった。閭里（九月山一帯の村：引用者）の人々は、互いに語り合って言った。この病気の発生は、実に檀君を移したのが原因である。厲氣がまず九月山の民家から起こり、徐々に文化県に浸透し、長淵・載寧・信川などの所に伝染していったのである<sup>50)</sup>。

このように、黄海道の人々の間では、伝染病の発生に対して、檀君を九月山三聖祠から平壤府の祠廟へ移したことが原因であると考えられていた。

その後、この伝染病はいったん収まったかにみえた。しかし数年を経て、伝染病はまた激しくなり、他の地方にも波及し、死者が多数に上った。被害が蔓延するに及び、将来を心配した李先齊は、独自に文献調査を行った。そして、一四二八年に右議政の柳観が上程した上疏文を見つけてそれを読んだ。その結果、柳観の訴えに矛盾はなく、檀君が昇天し隠棲した阿斯達山とは、まさに九月山のことでありと結論づけた。そして、「どうして平壤だけを慕ってそこばかり顧みようとするのか。檀君は九月山で山神となり、地元の人々も尊祀しているのに、いとも簡単に平壤の東明王と同じ廟に移すことなどできようか」と述べ、次のように主張した。

『三国遺事』の註に言う、桓因天帝とは、柳観の上書にいう檀因のことであり、天帝の庶子である桓雄とは檀雄のことであり。太初の時代の人々が、その根本を忘れずに寺宇を創立し、「桓」を「檀」に改めて「三聖」と称したのである。いつの時代に創られたのかはわからない。以前から檀君を平壤に移しているが、他の二人の聖人はどの地に置くのか。（今回の伝染病は：引用者）檀君が一人で地元の人々への怨みを起こしているだけではない。必ず二人の聖人（桓因〔檀因〕と桓雄〔檀雄〕を指す：引用者）たちが共に怪異をもたらし、癘病を発生させて、民に被害を与えているのである<sup>51)</sup>。

49) 以下は、金成煥、前掲『高麗時代の檀君伝承と認識』（一六〇～一七一頁）を参照。

50) 『端宗実録』卷一、端宗即位（一四五二）年六月己丑〔二八日〕条。「慶昌府尹李先齊上書曰……臣問黄海道人民發病之由。答曰、嚮文化縣檀君之祠、移於平壤之後、怪氣結聚、若有神狀夜行、黒氣成陣、有行動聲。有一人望而驚怪、隱避之、以是播告。閭里人相語曰、此病之發、實移檀君之故也。厲氣先起於九月山間、民黃漸漬於文化、長淵、載寧、信川等處」。

このように述べた後、李先齊は、九月山の三聖祠を修繕し、新たに神像を作って祀り、朝廷から官吏を派遣して告祭を行うべきであると訴えた。また、黄海道の人々による怪奇現象の話と伝染病の原因とを結びつけることには根拠がないとする批判意見を想定して、彼は中国の『宋鑑』に掲載された記事を紹介している。その記事は、中国の元豊末年に宮中に正体不明の物体が現れた後に神宗が崩御し、また、元符の末年にもこれが見られた後に哲宗が崩御したという怪事件に関するものであった。この記事では、正体不明の物体の様子について次のように描写している。

(その物体は：引用者) 家屋がなぎ倒されるような声を出し、その形は僅か一丈余りで雷のように彷彿として、金色の眼で行動し、石を擦ったような声を発し、黒気がこれを覆った。大きくはないが形は明瞭であり、この気が及ぶ所は生臭い血が四方に撒き散らされ、兵や刃を使用することは出来ない。また、ある時は人の形に変化し、ある時は驢馬となり、昼夜を問わず出てくる。多くは宮中の宮人たちが居住する所に現れ、また内殿にも及び、そのことが常となった。また、洛陽府の畿内には、ある物体が、時に人のようであり、ある時には犬が据わっているようであり、その色は真っ黒で眉目を分別することができず、初めは夜に小児を掠め取って食べ、後になると白昼と雖も人家に入って災難をなした。至る所で騒然として、人々は不安となり、これを「黒漢」と言った。力のある者は夜になると槍を持って自衛した<sup>52)</sup>。

このように中国で起こった怪事件を根拠に、李先齊は「怪気が像を成して人に害を及ぼすことは昔にもあった」と主張した。こうして、黄海道における伝染病の蔓延に関しても、檀君の神位を平壤に遷したことが原因であるとする説は、根拠のない説ではないとして、三聖堂の神位を再び祀り、伝染病の根を断つべきであると訴えた<sup>53)</sup>。以上が、李先齊による上疏文の全内容である。この上疏文では特に、疫病の原因について、平壤に一人移されてしまった檀君の怨みだけでなく、九月山の三聖祠に取り残された二人の聖人（桓因〔檀因〕と桓雄

51) 同上。「夫檀君、離平壤四百餘歲、而還隱於阿斯達爲神、則爲君於斯、爲神於斯、不厭於此地、明矣。……則檀君之去平壤、遐哉邈矣。其肯顧戀於平壤乎。且爲山神、致土人之尊祀、豈有樂遷於平壤、與東明王同廟哉。遺事註云、桓因天帝、即柳觀書所謂檀因也。桓雄天帝之庶子、即所謂檀雄也。遼初之人、不忘其本、創立寺宇、改桓爲檀。號稱三聖、果不知創於何時也。向者移檀君於平壤、而置二聖於何地。是檀君不獨起怨於土人、二聖必有騁怪作癘、爲害於民矣。」

52) 同上。「或者又以爲、怪氣、何有作厲爲害。文化閭巷之語、亦不足信。臣觀宋鑑、徽宗三年七月、黑眚見于禁中。記者曰、元豊末嘗有物、大如席、夜見寢殿上、而神宗崩。元符末又見、哲宗崩。政和以來大作、每得人語聲則出先。若列屋摧倒之聲、其形僅丈餘、彷彿如電、金眼行動、硜硜有聲、黑氣蒙之、不大了了。氣之所及、腥血四灑、兵刃皆不能施。又或變人形、亦或爲驢、晝夜出無時、多在掖庭、宮人所居、亦及內殿、習以爲常。又洛陽府畿内、或有物如人、或適居如犬、其色正黑、不辨眉目。始夜則掠小兒、食後雖白晝、入人家爲患、所至喧然不安、謂之黑漢。有力者、夜持槍自衛。」

53) 同上。「夫怪氣成像爲害、古亦如此。今之傳染病證、作怪多般、豈以爲誕、而不究其本乎。伏惟、殿下聿遵世宗之念、延訪大臣、究論天帝降于於檀樹之源、與夫遷主作怪之由、廣問文化、長淵、信川、載寧耆老之人、及原平、交河傳染病證、從權定議、復建聖堂之主、以斷傳尸之根、滿國幸甚。」

〔檀雄〕の怨みにもよると述べている点が興味深い。しかし、まだこの段階において、朝廷側はこのような訴えに耳を傾けようとはしなかった。

しかし、その後も伝染病は止むことなく頻発した。そのために、朝廷側はようやく本腰を入れて三聖祠の調査を行おうとした。成宗二（一四七一）年に、黄海道で発生した伝染病の原因を究明するために、黄海道觀察使の李芮に対して、三聖祠の存在や祭祀方法について詳しく調査するように命令が下された<sup>54)</sup>。この命令に従い、李芮は、文化県の古老人である前司直の崔池と前殿直の崔得江のもとを訪問し、三聖祠の事跡について聞き取り調査を行った。その内容を簡条書きに記録して、翌年の成宗三（一四七二）年に詳細な報告を行った。この報告書には、三聖祠に関する沿革とともに、当時の土着的民間信仰と結合した檀君信仰の在り方が具体的に記録されている。貴重な記録であると思われるので、以下にその抄訳を記してみたい<sup>55)</sup>。

- 一、俗諺では、檀君が初めて神となり九月山に入ったと伝えている。その祠堂は貝葉寺西の大甌山にある寺院に臨んでいた。その後、祠堂は寺院の下の小さな峰に移され、さらに小甌山へと移された。それが今の三聖堂である。大甌山や貝葉寺の下の小峰にあった祠堂は、今ではもうその址さえ残っていない。
- 一、檀君と父檀雄と祖父桓因を三聖と称し、祠堂を建てて祭祀を行ってきた。しかし、祭祀を廃止した後、堂宇は傾き崩れた。景泰の庚午年（一四五〇年を指す：引用者）に県令の申孝源がこれを再建し、戊寅年（一四五八年を指す：引用者）に県令の梅佐がこれに丹青装飾を施した。
- 一、三聖堂では、桓因天王が南向し、檀雄天王が西向し、檀君天王が東向し、それぞれ板で

54) 『成宗実録』卷一三、成宗二（一四七一）年十一月庚戌〔一二日〕条、および同十一月丙寅〔二八日〕条。

55) 『成宗実録』卷一五、成宗三（一四七二）年二月癸酉〔六日〕条。「黄海道觀察使李芮馳啓曰、臣因前下諭、訪問文化縣古老人、前司直崔池、前殿直崔得江、得三聖堂事跡、條錄以聞。一、諺傳檀君初爲神、入九月山、祠宇在貝葉寺西大甌山、臨佛刹。後自移于寺下小峯、又移于小甌山、即今之三聖堂也。大甌山及貝葉寺下小峯、今無堂基。其時致祭與否及并祭三聖、未可知。一、檀君及父檀雄、祖桓因、稱爲三聖、建祠宇祭之、自祀廢後、堂宇傾頽。逮景泰庚午、縣令申孝源重創、戊寅縣令梅佐施丹青。一、三聖堂桓因天王南向、檀雄天王西向、檀君天王東向、并板位。俗傳古皆木像、我太宗朝河崙建議、革諸祠木像、三聖木像亦例罷、儀物設置與否未可知。一、三聖堂西夾室、九月山大王居中、左土地精神、右四直使者、竝位板南向。一、古無典祀廳、梅佐乃於三聖堂下作草屋數間、令緇徒居之、祭祀時則齋宿于此、祭物亦於此辦設。……一、廟宇移平壤後、罷此堂之祭、今已六十餘年。或云我太宗朝庚辰、辛巳、壬午年間也、未知是否、其降香致祭儀軌亦不可考。一、九月山上峯非天王堂、乃名爲四王峯、亦古降香致祭處、我太宗乙未年間始革之、其堂基曾無見者、今亦冰凍危險、人不得上。一、關西勝覽載文化縣古跡云、九月山下聖堂里、有小甌山、有桓因、檀雄、檀君三聖祠、九月山頂有四王寺、古之星宿醮禮處。一、自三聖堂移平壤後、雖國家不致祭、若祈雨、祈晴。縣官具朝服親祭、祭用白餅、白飯、幣帛、實果、此外不得行他祭。邑俗稱爲靈驗、人不敢來祭。一、祈雨龍壇在三聖堂下百餘步、未知設置日月。縣所藏宋景德三年丙午五月儀注載、用餅、飯、酒及白鵝、行祭。今代用白雞、不用豚。一、三聖堂下近處人家稠密、自罷祭後、惡病始發、人家一空。其雞、豚宰殺、爲神所厭之語則未聞。禮曹據此啓、百姓皆謂、三聖堂移設于平壤府、不致祭、其後惡病乃興。是雖怪誕、無稽之說。然古記、檀君入阿斯達山、化爲神。即今本道文化縣九月山、其廟存焉。且前此降香致祭。請從民願、依平壤檀君廟例、每年春秋降香祝行祭。從之」。

できた神位が並べられていた。昔はみな木像であったが、朝鮮朝に入り太宗代の時に河嶮が建議して、各地の各祠堂にある木像を祀る様式を改廃した。その際に、三聖の木像も廃止された。

- 一．三聖堂の西の夾室には、九月山大王を中央にして、左には土地精神、右には四直使者が配置され、神位はすべて南向して置かれた。
- 一．昔は典祀庁が無く、梅佐が三聖堂の下に数間の草屋を造り、僧侶をそこに住まわせた。祭祀の時はここで斎宿し、祭物もまたここで準備した。
- ……（中略）……
- 一．廟宇を平壤に移して後、この祠堂での祭祀は廃止された。今ではすでに六十余年になるという。ある者は、我が太宗の時代の庚辰（太宗即位年、一四〇〇年：引用者）、辛巳（太宗元年、一四〇一年：引用者）、壬午（太宗二年、一四〇二年：引用者）の年間であったというが、よく分からない。
- 一．九月山の上峰に天王堂はない。この峰は四王峯という名前である。ここもまた、昔、香を焚き祭祀を行った所であるが、我が太宗の乙未年間（太宗一五年、一四一五年：引用者）にこれを改廃した。今では、もはやその祠堂の址を見た者がいない。
- 一．『関西勝覧』に文化県の古蹟を記載して次のように記している。「九月山の下にの聖堂理に小甌山があり、桓因・檀雄・檀君の三聖祠がある。九月山の山頂に四王寺があるが、これは昔の星宿醮礼の場所であった」と。
- 一．三聖堂を平壤へ移した後からは、国家をあげての致祭は行われなくなった。しかし、祈雨祈晴をする時には、県官が朝服を着て丁重な祭祀をとり行った。祭祀には白餅・白飯・幣帛・果実を用いた。その他に別の祭祀が行われることはなかった。村では靈験あらたかな場所であると考えて、敢えてここに来て祭祀を行うようなことはなかった。
- 一．祈雨のための龍壇が三聖堂の下の百余歩の所にある。設置した日時についてはよく知られていない。県に所蔵された「宋景德三年（高麗穆宗九年、一〇〇六年を指す：引用者）丙午五月」の儀註には、「餅、飯、酒、及び白鵝を用いて祭る」と記載してある。今は、代わりに白鶏を用いて、豚は使用しない。
- 一．三聖堂の下の付近では人家が稠密であったが、祭祀を廃止した後からは、悪病が発生し始めたために、人家はすべて空となった。鶏や豚を屠殺したことを神が嫌ったという話は、まったく聞いたことがない。

以上が、黄海道觀察使の李芮によって行われた調査の結果である。この調査報告書ではいくつもの注目すべき事実が記されている。まず注目したいのは、九月山の山頂にあった四王寺では道教の星宿祭祀である醮祭が行われていたという点である。その他、三聖祠の下には祈雨祭を行うための龍壇が存在した点という点にも注目したい。これらの記事から、九月山一帯が一種の山岳信仰の中心地であり、特に祈雨祭が盛んに行われた場所であったことがわ

かる。朝鮮半島の気候は大陸的な気候の影響を受けて、一般的に雨量が少なく、長期にわたって旱魃が続くことも珍しくなかった。そのために、上は国王より下は郡県の守令や村人に至るまで、祈雨祭は重大な関心事であった。祈雨祭の場所としては、主に山上・川辺・深淵の地が選ばれ、祭場は神域として山神や堂神を祀ることが多かった<sup>56)</sup>。九月山も朝鮮を代表する祈雨所として、古くからよく知られた場所であった<sup>57)</sup>。上の報告調査によると、遅くとも高麗時代前期の一〇〇六年頃には規模の大きな祈雨祭がこの地で行われていたことがわかる。また、三聖堂の夾室に「九月山大王、土地精神、四直使者」が祀られていたとあるので、おそらくこの夾室が本来の祠堂に相当し、特に九月山大王がこの山における本来の信仰対象ではなかったかと思われる。その後、高麗末の元（モンゴル）干渉期において檀君神話が浮上することにより、この地が檀君の定都地にして隠棲地であるという神話が事実化していき、ついには「桓因〔檀因〕－桓雄〔檀雄〕－檀君」を祀る祠堂が、本来の祠堂を脇に押しつける形で設けられるに至ったのではないかと考えられる。

さらに注目したいのは、時期は明確に示されていないが、三聖祠には高麗朝廷からの正式な使者が派遣され、国家的な祭祀が行われていた事実である。しかし、朝鮮王朝創建時に行われた祭祀制度の改革によって、九月山三聖祠における祭祀方法は大きく変更されたようである。それまでの三聖祠における祭祀は、信仰対象である三聖が「桓因天王、檀雄天王、檀君天王」と称され、またみな木像で造られていた。このことからわかるように、それまでの三聖祠における祭祀は、仏教・道教・土着の民間信仰が混淆したものであった。しかし、朝鮮王朝が推進した儒教的儀礼への変更によって、三聖の木像は廃棄され、神位板だけが残されることとなった。さらに、一四一二年に平壤府の箕子廟に檀君が合祀されてから以降は、三聖祠での公式的な祭祀が取り止めになってしまった。

この報告書では、以上の調査結果をもとに、三聖祠の崇り説は根拠の無い話であると結論づけている。しかし、檀君が神化した阿斯達山とは九月山のことであり、平壤府にある檀君廟の典礼に準拠して、九月山の三聖祠でも毎年春秋に正式な祭祀をとり行うように進言している。結局、国王の成宗はこの進言に従うことにした。こうして、九月山三聖祠においても公式的な祭祀が再び行われるようになった<sup>58)</sup>。これ以降、檀君の崇り説は聞かれなくなっていった。また、旱魃のために大きな被害が発生した場合には、朝廷から祭官が派遣され祈雨祭がとり行われた<sup>59)</sup>。

56) 村山智順『積奠・祈雨・安宅』（朝鮮総督府、一九三八年、一二一頁）。

57) 九月山も祈雨の効験があるとされ、祈雨祭がたびたび行われた。九月山の祈雨祭については、金成煥、前掲『高麗時代の檀君伝承と認識』（一七三～一七七頁）を参照。

58) 肅宗二一（一六九五）年には、三聖祠にある檀君の祝文を平壤の檀君廟の例にもとづいて「前朝鮮檀君」と書くことを命じた（『肅宗実録』卷二八、肅宗二一年六月丙申〔六日〕条）。英祖四一（一七六五）年には、木の箱を作って三聖祠の土版を覆い（『英祖実録』卷一〇六、英祖四一年一二月己酉〔八日〕条）、三聖祠の重修と奉審を命じた。正祖一三（一七八九）年には、三聖祠を改修した上で祭式の改正も行った（『正祖実録』卷二七、正祖一三年六月庚申〔六日〕条）。

59) 例えば、中宗二二（一五二七）年（『中宗実録』卷五九、中宗二二年五月乙巳〔二九日〕条）や、中宗二六（一五三一）年（『中宗実録』卷七〇、中宗二六年五月庚子〔一七日〕条）に祈雨祭が行わ

## お わ り に

一五世紀の朝鮮において黄海道地方を中心に疫病が大流行した際に、疫病の原因が檀君の祟りによるものであるという噂が広まっていった。本稿では、この檀君祟り説がどのような理由で発生したのか考察した。本稿の考察結果をまとめると次の通りである。

黄海道文化県にある九月山には檀君を祀った三聖祠という祠堂があり、高麗時代から朝廷による公式的な祭祀が行われていた。三聖祠では、仏教や道教と習合した土着の民間信仰のもとづく祭祀が行われていた。その後、儒教（朱子学）を統治理念とする朝鮮王朝が建てられると、九月山三聖祠における祭祀の在り方が一変した。新しく建てられた朝鮮王朝は、全国の祠廟で行われている祭祀形式を儒教の祭典儀礼にのっとったものに改変しようとした。この改革によって、三聖祠に祀られていた木像は撤去され、祭祀方法も儒教式に改められた。そればかりではなく、朝鮮王朝は自らの歴史的正当性を権威付けるために、平壤府に檀君と箕子を合祀した祠廟を新たに設けた。これにより、高麗時代から行われてきた九月山三聖祠における公式的な祭祀は廃止されてしまった。その後さらに、檀君と東明王を合祀する新たな祠廟が平壤府に建立された。新王朝によるこのような措置に対して、当然のことながら、黄海道の人々は大きな不満を抱いた。そのために、黄海道地方を中心に疫病が流行した際に、黄海道の人々は疫病の流行が檀君の祟りによるものであると考えるようになった。疫病被害の拡大と同時に、これが噂となって全国に蔓延していったのである。このような噂が流布される背景には、三聖祠における檀君祭祀を朝廷による公式的な祭祀として復活させたいという、黄海道地方の人々の願いがあったものと考えられる。

そしてまた、檀君の祟り説の背景には、仏教・道教・土着的な民間信仰などが混在した高麗時代の民衆的な祭祀が、朝鮮王朝の樹立によってすべて儒教的なものに強制的に改変させられたことに対する民衆の不満が存在したと思われる。朝鮮王朝による儒教的祭祀への改変は、それまで地方で行われていた民衆的な祭祀を国家に従属する祭祀として格下げするものであった。それはまた、民衆主体の地方祭祀が国家によって独占的に侵奪されていく過程でもあった。特に九月山の三聖祠では、「桓因天王－檀雄天王－檀君天王」という「三聖」を祭祀対象としていたが、これは儒教思想とはまったく関係のない、朝鮮土着の「三神」信仰に関連するものであったと考えられる<sup>60)</sup>。さらに「天王」という称号が付されているように、

れた記録がある。

60) 朝鮮の巫俗伝統では、子供の出産を司る神として「삼신 (Samsin)」が信仰されてきた。現在の韓国でも、俗に「삼신할머니 (サンシン婆さん)」として親しまれている。この言葉の語源に関しては諸説あり、漢字語の「産神」「三神」「山神」に由来するという説などがある。しかし、一般的には、朝鮮語で「삼 (Sam)」とは「生・生命・胞胎」を意味することから、「삼신 (Samsin)」とは人間の命を扱い、出産や授子を観掌する神であると考えられている。一方、植民地期朝鮮においては、いわゆる檀君ナショナリズムが勃興し、朝鮮巫俗で祀られている「삼신 (Samsin)」を「桓因－桓雄－檀君」の「三神」のことでありとみなし、檀君が朝鮮人の生命を司る神であると考えられてきたと主張する者が現れた。彼らは九月山三聖祠を檀君三神信仰の拠点であったと主張した。例えば、当時を代表する朝鮮人宗教学者であった李能和は、『朝鮮巫俗考』（『啓明』第一九号、一九二七年五月、啓明俱

三聖祠における檀君信仰は、朝鮮土着の天神信仰と道教的な祭天儀礼が習合したのもであった。それに対して、朝鮮王朝が建国当初に推進しようとした檀君祭祀は、古朝鮮の建国聖人である檀君と箕子の二人の崇奉を目的として、新王朝の歴史的権威と正統性を確立するために行われたものであった。それはまた、明朝の冊封を受けた朝鮮王朝が、儒教的な統治体制を構築しようとする一連のプロセスの中で行われたものであった。平壤府に檀君廟が建立された際、黄海道地方の人々が不満を抱いたのは、檀君祠廟が他の場所に移されてしまったことと同時に、移転先の祠廟が本来の檀君祠廟とはまったく異なる性質のものに変容してしまった点にあったといえよう。疫病が流行した際、三聖祠の調査を行った李先齊が、「三聖のうちで檀君だけが移された後、取り残された二人の聖人の祟りによるものである」と主張したのは、黄海道地方の人々が抱いていた平壤檀君廟に対する違和感にもとづいたものであったと考えられる。このような黄海道住民の強い要望もあって、結局、一四七二年に国王の成宗は三聖祠における祭祀を公式的に行うように命じた。

しかしながら、朝鮮王朝が定立させようとした儒教的な祭祀は、主に政治秩序に関する儀礼体系であり、天変地異や自然災害などに対する精神的な救済効果は望めなかった。特に大陸性の気候を有する朝鮮半島では旱魃による飢饉が多発した。このような天災に対して、朝鮮の民衆は常に不安を感じ、時には死と直面せざるをえなかった。これに対して、仏教・道教や土着的な民間信仰にもとづく祭儀は、自然神に対する呪術的効能や人間の魂の救済に直結する効果もたらされた。特に三聖祠についてみると、九月山は古くから祈雨に効験のある場所としてよく知られていた。これに関して、三聖祠における公式的な祭祀が再開されてから、特に中宗代に朝廷主宰の祈雨祭が挙行されている点が注目される。このことは、朝鮮時代に入って全国の祠廟での祭祀が儒教式に改変されてからも、地元黄海道の人々は依然として三聖祠に自然災害（旱魃）に対する呪術的な効験（祈雨による降雨）を期待していたことを示している。一五世紀に発生した檀君の祟り説は、檀君信仰の拠点であった黄海道住民たちの恨みや不満を反映したものであると同時に、朝鮮朝に入って切り捨てられていった、このような仏教・道教や土着的な祭祀儀礼に対する民衆たちの憧憬を反映したものでなかったかと考えられる。

（追記）本研究は、共同研究プロジェクト「天変地異の社会学Ⅲ」による研究成果の一部である。

（2013年12月17日受理）

楽部発行、四一頁）の第一五章「巫祝之辞及儀式」の「三神」の項目でそのように説明している。以上、崔南善『朝鮮常識』（高麗大学校亜細亜問題研究所編『六堂崔南善全集（六）』玄岩社、一九七三年、二四一頁）の「三神」の項目を参照。

## Connections between the Plague and Religious Services for Dangun at Samsung-Sa, Mt. Guwol, during the Choson Period

SASSA Mitsuaki

In the 15th century, the plague was widespread in the Hwanghae-Do Region, killing many Korean people. At the time, there was a popular rumor that the plague was caused by the curse of Dangun, the mythological being who founded the Choson State (the oldest country in the Korean Peninsula). By analyzing the related articles from Choson Wangjo Sillok (Annals of the Choson Dynasty), this paper considers the reason for the emergence of this rumor, thus clarifying the following facts.

At Mt. Guwol in Hwanghae-Do, there existed a shrine known as Samsung-Sa, which was strongly regarded as holy by the local people. It is assumed that because Mt. Guwol had altars at which one could pray for rain, people considered the shrine especially effective for bringing rain. Moreover, the three saints that contained Dangun were enshrined at Samsung-Sa, where religious services based on the rituals of Buddhism, Taoism, and native folk beliefs were performed. During the Goryeo period, a messenger was sent from the Goryeo Imperial Court, and official religious services were carried out at Samsung-Sa. Thereafter, Lee Seonggye founded a new dynasty in 1392 and named it Choson to connect it with the oldest country in the Korean Peninsula. In addition, to enable the Choson Imperial Court to worship the national building Saint of Old Choson State. Dangun was enshrined at a new shrine in Pyongyang, where the Imperial Court performed the official religious services for Dangun. In addition, the Choson Dynasty adopted neo-Confucianism as the national governing principle and tried to accordingly change religious services in shrines throughout the country. In alignment with this reformation, not only were the religious services performed at Samsung-Sa modified to conform to Confucianism but also the official religious services at the shrine were abolished.

The people of Hwanghae-Do were extremely dissatisfied with the Choson Dynasty's measures. Therefore, when the plague centered on Hwanghae-Do in the 15th century, it was popularly believed that the epidemic had resulted from Dangun's curse. This rumor spread throughout the country, and the Choson Imperial Court sent an inspector to Hwanghae-Do to thoroughly investigate the shrine's origin and connection to the plague. Consequently, it was reported that Dangun's curse was an unfounded inference, and the rumor was contradicted. However, the Choson Imperial Court accepted the demand of the Hwanghae-Do inhabitants and resumed the official religious services at Samsung-Sa. Furthermore, the Choson Imperial Court

began performing religious services at Samsung-Sa, specifically prayers for rain.

In conclusion, the rumors of Dangun's curse emerged because of the Hwanghae-Do inhabitants' dissatisfaction regarding the building of the Dangun Shrine in Pyongyang. In addition, the situation reflected the public's yearning for the religious services based on Buddhism, Taoism, and native folk rituals that were abandoned by the Choson Dynasty.